

「手術から2年、諦めていた子供が生まれました」

小関早苗（38歳）

待ちに待った我が子の誕生

手術から2年目の昨年10月19日、長女の一遥（いちよう）が生まれました。もう子供はできないものと思っていた私たち夫婦にとっては、待ちに待った我が子です。寝顔、泣き顔、無心におっぱいを飲む顔、そして笑顔、かわいくて見飽きることがありません。

誕生した時から遥かな将来まで健やかに幸せであってほしい、との願いを込めて一遥という名前をつけました。おかげさまですくすくと育ってくれています。子供の世話でてんこ舞いの毎日ですが、この幸せは広尾で子宮保存手術を受けなければ手に入れることはできませんでした。



結婚して10年間の不妊

広尾で手術を受けたのは平成8年11月4日ですが、実は手術を受ける2ヶ月前まで子宮筋腫があるなんて思ってもみませんでした。たしかに、いつも生理の出血は多くて、生理になるとタンポンをしたうえに夜用の厚いナプキンを当てて出勤していました。それでも自宅のある大月から神田まで通う通勤の途中で洋服を汚してしまうのではないかと心配するほどでしたが、こればかりは他人と比較できませんから「年齢的にみてこれが通常の生理なんだわ」くらいに思っていました。

ところが平成8年の9月に不正出血があり、初めて婦人科の病院に行きました。友人に紹介された横浜のクリニックです。初めて行く婦人科というのはやはり不安なもので、「もしかしたら悪い病気？」と思う一方で「ひょっとしたら妊娠？」という淡い期待もないわけではありませんでした。それというのも結婚してかれこれ10年になるのに、まだ子供に恵まれなかったからです。

子宮筋腫があるとは夢にも思わず、不正出血を「ひょっとして妊娠？」と思ってしまうなんて見当違いもいいところですが、その時まで私は女性の生理や子宮の病気について何の知識ももっていなかったのです。ですから、「筋腫がありますね」と医師から聞かされても、「キンシュ？それって何？」「私がシキウキンシュですって？」と、頭の中は？？？ばかりで、すぐには事態をのみ込むことができませんでした。

ホームページで広尾を知る

筋腫があると告げたあとで医師が言った言葉も私を困惑させました。

「子供が欲しいなら急いで作ってください。妊娠するか、子宮をとるか、どちらかになるといけませんから」と言うのです。いったい何なの？、急いで作ってくださいと言われてたって、今まで10年間も子供ができなかったのに。

「それじゃ、どうしたらできるのよ。それに、子宮をとらなくてはならないほどの病気があって妊娠なんてできるの？」と、頭の中はまた？？？でいっぱいになりました。子供を作るどころか、子宮をとるという悲惨な現実だけで、頭の中は絶望的になりました。

広尾のホームページを知ったのは、横浜のクリニックを紹介してくれた友人のアルバイト先がホームページのプロバイダーだったという幸運からです。広尾のホームページはまだ開設して間がなく、患者さんの体験レポートもわずかでしたが、読んでいくうちに「ここで手術をして子宮を残すことができれば、子供はできなくてもいい」と思うようになりました。いつしか、子供を作ることよりも子宮を守ることに夢中になっていました。

それでも広尾で手術をしようと決心するまでには迷いがあったことも事実で、その理由のひとつは自費診療であるため手術代にお金がかかるということでした。自分の体のことなのだから自分で決断するしかない、と言われましたが、費用のことを考えれば、当然、主人にも相談しなければなりません。

主人は「それで体が楽になるのなら手術したらいいよ。たとえ、子供はできなくとも」と言ってくれました。主人は私が生理のたびに青白い顔をして辛そうにしているのをずっと見てきて、そう言ったのでしょう。ほんとうに手術を受ける前の私は貧血でとても疲れやすく、生理の時に限らずいつも体が重く、辛かった。それが子宮筋腫のせいだとは全く思いもしなかったのですが。

やっぱり子供が欲しい

斎藤先生はよく「手術を受けた後に、これまでの生理がどんなに異常なものだったかがわかるよ」とおっしゃいますが、ほんとうにその通りで、手術後は出血の量が10分の1以下になり、体がものすごく楽になりました。「こんなに楽になったのだから、それだけで十分」と思うほどの体調の変化でしたが、そう思う一方で「こんなに回復したのだから、もしかしたら子供もできるかもしれない」と、子宮を残すことに夢中だった私が、再び妊娠を期待する気持ちになりました。健康になってみると、やっぱり子供をもつ夢がふくらんでいくのです。

残念ながら1年が過ぎても妊娠の兆しはありませんでした。「やっぱりダメなんだ」という諦めの気持ちが広がってきて、主人と「子供だけが人生じゃないものね。子供ができなくてもいいよね。こんなに体が楽になったんだから手術した意味はあったよね」と話し合ったのですが、人生とは摩訶不思議なもので、諦めたとたんに妊娠がわかったのです。忘れもしない昨春、3月18日のことです。7週目に入ったところでした。

切迫流産、そして無事出産

もう嬉しくて嬉しくて、さっそく斎藤先生に電話しました。天にも上るような気持ちで「妊娠しました！！」と報告すると、先生は「喜んで毎週のように病院に行っていると、流産しちゃうよ」と意外にも冷静なアドバイス。妊娠初期は内診などの刺激で流産することもあるから気をつけなさい、という考えてみればもっともお言葉だったのですが、妊娠がわかって舞い上がっていた私には「流産」という言葉がひどく冷酷に聞こえたものです。

ところが、それから間もなく、先生の心配が現実のものになりました。決して毎週のように病院に行っていたわけではないのですが、職場で突然、大出血してしまったのです。かかっていた病院に行くと「切迫流産ですぐに入院」とのこと。その時まで切迫流産という言葉も聞いたことがなかった私は、「ああ、やっぱり流産してしまった」と早合点してしまい、看護婦さんに「胎児のために、とにかく安静にしている」と言われてはじめて「胎児？ということは、まだ大丈夫なの？」と、流産ではないことを知りました。妊娠や出産についてもなんと無知だったことかと思えます。

2週間の入院の後、自宅で5月まで安静に過ごしました。出産前にぜひ一度、斎藤先生にお礼が言いたくて、広尾をお訪ねしたのは8月に入ってからでした。その時に先生が「どこで出産するの？」と病院を心配して下さり、広尾で手術した経緯をよくわかって執刀（出産は帝王切開でした）してくれる病院がよいだらうとのこと、いろいろと相談にのってくださいました。

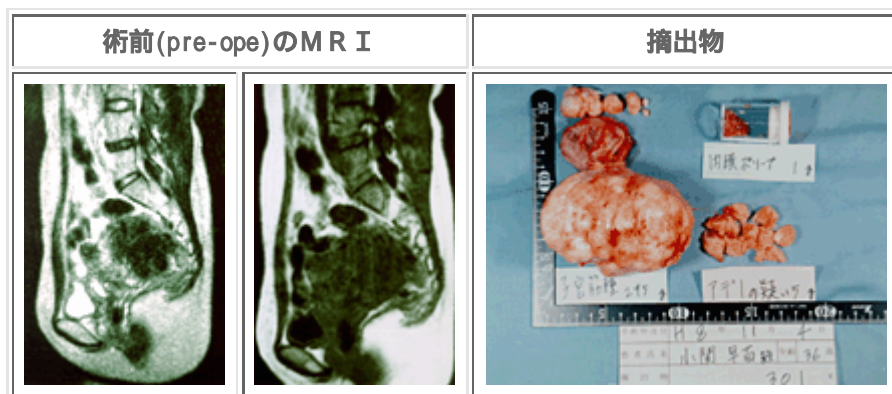
そうして10月19日に無事、元気な女の子（8月にお訪ねした時に、斎藤先生に性別を見てもらいました）の産声を聞くことができたのです。

幸せを手に入れた

一遥が誕生してからというもの、家の中は一遥を中心に回っています。初めてのお正月、雛祭りとは、一遥が家族に加わったことでわが家はいっぺんに華やきを増しました。主人は仕事から帰ってくると、真っ先に一遥のベッドのそばに行き、寝顔を見ています。子育ての先輩で、何くれとなく私を助けてくれる義母も、毎日それはそれは一遥をかわいがってくれます。



こんな夢のような幸せを手に入れることができたのも、斎藤先生に手術していただいたからと心から感謝しています。広尾を知っていても、手術を受けようかどうかと迷っている方もいらっしゃると思いますが、どうか、もう一度考えてみてほしいと思います。一度きりの人生なのですから。



	術前 (pre ope)
赤血球(RBC)($\times 10^4$ /ul)	444
血色素(Hb)(g/dl)	9.7
ヘマトクリット(Ht)(%)	30.2
CA - 125	180
備考	病理：平滑筋腫 295gm 腺筋症 5gm 内膜ポリープ1gm 術後検査前に妊娠した。

「一人でも多くの同じ病気の女性が救われることを祈って」

Miss. S M (42歳)

私が広尾メディカルで子宮筋腫の手術をしようとしたのは98年の3月に初診で斎藤先生にお目にかかった当日だった。「ああ探していたものがここにあった。」という喜びと安堵の気持ちで帰途についたのが昨日のこのようだ。手術から約1年、私の人生は公私ともに大きく変わった。

広尾メディカルクリニックに出会うまで

広尾メディカルクリニックの情報は友人がインターネット検索で3月中旬に見つけ教えてくれた。子宮筋腫その物に関する情報は私もインターネットでチェックしたが、病院に関する情報は主に出版物や友人の紹介に頼っていた。広尾メディカルクリニックのホームページにアクセスするとクリニックにおけるレーザーを使った手術などの情報に加えて、MRIを始めとする多くの患者さん達の情報が載せられていることに驚いた。私は広尾メディカルクリニックのホームページに出会うまでに、すでに3ヶ所の大学病院を訪れていた。

3月に通院を再開したのは97年の冬、長年通いつづけているエステティックサロンでオイルマッサージを受けていた時、担当のエステティシャンからこの腹部の状況は尋常ではないと言われ、とうとう解決するのは今しかないと思ったからだった。

10年近く前に卵巣腫瘍ではないかとの人間ドックの結果から、「J大学病院を紹介されCTスキャンをかけたところ卵巣腫瘍ではなくテニスボールより一回り小さい子宮筋腫だと告げられた。当時子宮筋腫の知識が乏しかった私は医師の「これは良性ですから。ほっておいて様子を見ましょう。薬も何も今は必要ありません。来年また診てみましょう。」の言葉に治ったわけではないのにほっと胸をなでおろした。それから数年はチェックし続けたものの、医師からの言葉はいつも同じ、しかも耐えられないような生理痛や出血といった自覚症状はなかったため、私自身の生活の忙しさから子宮筋腫に対する対応は薄れていった。

30代の後半は、外資系の総合化学医薬会社でドイツ、アメリカへの頻繁な出張や、日本における事業立ち上げの責任に追われていた。グローバルなエンジニアリングで会社自体が大きく変革する中、日本経済を中心にアジア経済の落ち込みがさらに仕事のプレッシャーをよんで、ここ数年はともすれば自分の体のことは後回しにされていった。しかも仕事をしながらMBAのコースをとった97年、98年の、二年間の経営修士課程の間は終始息をつく間もない生活を送ることとなり、心身ともにきつくて当然だと思っていた。結果、ふと気がつけば自分の体の異常を他人に指摘されるまでになっていたのだ。

細胞は二乗で増殖する。最初は小さな腫瘍であってもそれはカーブを描いて増えて行くからはっと気がつけば最後は難しい選択を迫られるようなことにもなりかねない。実際、エステティシャンに指摘されてから3月までの間に自分でも見下ろしてみればお腹の形がどんどん変わってきたという自覚があった。

もっとも、はっと気がつけばというのは詭弁であって、過去に大きな椎間板ヘルニアの手術をしたことがあったため、自分の体に再びメスは入れたくない、あんなに長く苦しい入院生活はもうごめんだ、医師が言ってくれたようにこれはまだ大丈夫だろう、でもじゃあ一体いつまで、筋腫が小さくなるからと服用しているこの漢方薬は効いているのだろうか、といったさまざまな葛藤が何度か胸をよぎっていたのは事実だった。

3月上旬に再診に訪れたJ大学病院でも友人の紹介で訪れたT大学病院でもほんの数分の診察とやり取り、内診、細胞診で必ず、「ここまで大きくなったのでは子宮全摘ですね。臍の上から縦に切って取り出して、3週間の入院。」と言われていた。

友人がオーナー一家ということもあって紹介されたJ医大では友人の弟さんである大学理事長がわざわざ会いに来て下さり、産婦人科の教授を紹介する労をとってくださった。その時、理事長は待合室で病院の壁をたたきながら「大丈夫、子宮は取ってしまうのは簡単だから。

ほらこういう壁だって一部塗りなおしたり取り替えたりは手間だけど、全部取り外すのは楽でしょう。そういう手術だし短い時間で済むから安心しなさい。子宮は取ってもぜんぜん大丈夫なんですよ。」と語った。

診察をした教授はCTスキャンでお腹の状態をチェックした後、「じゃあ、手術はいつにします。」とだけ聞いた。私が「全摘の手術ですか。」と聞くと教授は「MRIをとってみないと細かいところまではわからないけど、この大きさでは全摘ですね。悪いところを取っていたんじゃ、子宮自体がなくなっちゃう。ま、ご本人がどうしても残したいと言うならそうしますけど、すぐ再発する可能性がありますからね。縦に切るから術後の状況にもよるけどだいたい三週間くらいの入院ですね。MRIの予約を入れて帰ってください。」とだけ語ってカルテに向かってしまった。

その教授は某メディカル雑誌で患者の希望も考慮に入れて筋腫だけを取り除く子宮筋腫核出術を前向きに行っていると紹介されている人物だった。MRIはそのJ医大でとったものの、そこで手術をしようという気持ちは沸いてこなかった。

また別の銀座にあるクリニックを訪れた時はもとJ医大出身の医師に、「広尾メディカルクリニックでなんと言われたか知らないが、僕なら力づくで全摘だよ。」と言われた。確かに病状によっては全摘をよぎなくされることもあるだろう。しかし、最初は様子を見ようとして患者には告げず、筋腫が大きくなってから何故こうも簡単に会った全ての医師が患者の人格、気持ち、人生設計とは無縁にまず子宮全摘を言い渡すのか、私はその現実にはびっくりした。

J医大の理事長の言葉どうり全摘手術のほうが子宮筋腫核出術よりも簡単だからか、全摘手術のほうが保険の点数が高いのか、子宮がなくなって体内に死腔ができてホルモンバランスに支障が生じても生存していればいいのか、大きく縦に体の前面に残った傷を見て一生を過ごす女性の気持ちなど考慮に入れるほうが贅沢なのか、いずれにしてもそこに患者への目線は欠けている。

仕事と大学院の合間をぬって子宮保存にかけて病院を訪ね歩き医師のセカンドオピニオンを求め続けても、もはや自分にはその可能性はないのだろうか、という暗澹たる思いが胸をよぎった。どこの医師も患者にはそれぞれ違った人生設計、価値観があり、患者と医者は同等の目線で話をするべきなのに、そういうことがわかってもらえないのだろうか、とすら思った。と同時にここまでの10年間、我慢できないほどの自覚症状がなかったとは言え、自分の体は自分が守るという責任をとってこなかった自らのつけが回ってきたのだと感じた。

広尾メディカルクリニックを訪れて

まるでペンションのような可愛い、綺麗なクリニックを予約の日に訪れ、斎藤先生と初めてお会いした日のことを私は忘れることができない。インターネットに情報を開示している、ということで私はすでにある程度好意を持ってクリニックを訪れてはいた。しかしあれほど心満たされてクリニックを去ることが出来るとは思ってもみなかった。

インターネットは情報を水平展開させ、時間的またコスト的なロスをなくし、分散化した場所で双方向の広い意味での“ビジネス”を可能にする。それは今までの縦社会、上下関係、閉鎖性、数多くの差別を超える手段でもあるがゆえに、既存の体制、ビジネスに甘んじることなく、リスクを負いながらチャレンジするベンチャービジネスを多く生み出している。それらが主にアメリカで急成長しているのは、既存の体系では得られない顧客満足度を得られることに好感をもった顧客が支え、インフラが後押しし、そのビジネスへの期待度が市場において評価されているからだ。医療に関しての例ではアメリカの友人達は必要に応じてカルテやCTスキャンなどの画像をインターネットで遠隔地にいる著名な医師に送って専門的なアドバイスを得るなどといったこともしている。

同時に情報開示は発信者も含め、個々が情報に対するリスクや責任を負うこととなる。情報の開示、患者の立場に立った進んだ医療ケアの必要性は保険料圧縮の問題と共にやっと日本でも問われ始めている。

私は広尾メディカルクリニックのホームページを見た時、あえてインターネットにここまで情報をのせ発信させているのは広く自分の技術、実績を開示することに自信があり、リスクを負いながらチャレンジし続ける起業家精神に富んだ若若しい発想の医師かもしれないと感じた。顧客満足度を考えている人ならば私を人間として女性として同等の目線で話をしてくれ、他の病院と違う扱いをしてくれるかもしれない。

また一方、そうであるならば規制、閉鎖性の色濃い日本ではこのクリニックは過去多くの難しい局面を迎えてきたかもしれないな、とも思った。

斎藤先生にお会いしたとき、私は自分の感が間違っていなかったことを確信した。先生のオフィスともとれる診察室で、私の目を見ながら先生は話を聞いて下さった。スキャンで筋腫の大きさを見ながら「これでは他で全摘と言われたでしょう。でも大丈夫。子宮は残ります。教科書どうりの子宮にして返してあげますよ。」と言われた。

私は身じまいをすませてベッドから降りるとき、先生が「大きなため息をついているね。」とつぶやいておられるのが聞こえた。私は先生がそうおっしゃるまで自分があまりに嬉しい驚きでため息をついたことすら気付かなかった。そしてそれに気付かれた先生に驚いた。

「内診はしないのですか。」と訪ねると「それはさんざんよそでやってきたでしょう。そこが問題なのではないでしょう。貴方の今の問題は子宮自体が妊娠6ヶ月目を過ぎようとしているくらい筋腫で大きくなってそれをどうするかでしょう。」と言われた。どこの病院に行っても、今までの経過報告をした後、まず下着を脱ぎ診察台に登り内診をするよう言われ続けていた私にとっては新鮮で安堵感に満ちた一時だった。

「メスや各種レーザーを使いながらの高度な技術が必要な手術です。筋腫だけ確実にとってあげます。詳しいことは貴方がMRI他のデータを取った後、それらを見ながらまた何度でも説明してあげます。もし今までここで手術をした患者さんと話し合いたいなら連絡をとって直接話を聞けるようにしてあげます。手術のビデオも取っているから貴方の病状に近い人のビデオと一緒に見ながら説明をしましょう。もし良かったら入院している患者さんと今日お話をしていってください。」という先生のお言葉で花や草木に囲まれた二階のリビングに上がり、ほんの三日前に手術を受けた入院患者さん達とお茶を頂きながら談笑した。彼女達は遠方からこのクリニックにやはり子宮保存の最後の望みをかけてやってきた人達だった。あと二日で退院という彼女達は元気でそして満足感に満ちているように思えた。

仕事と大学院のスケジュール調整と、クリニックでの手術より大病院や総合病院のほうが何かあった時安全ではないか、と薦める母の理解を得ることに弱冠時間がかかり、手術は5月18日に決まった。心配してくれる友人達に経緯を報告すると、医学、製薬関連の仕事に従事する友人からは続々とメールや電話が届いた。

それらは母の心配に酷似したものから斎藤先生のレーザーを使った手術に対する多くの質問も含まれていた。私は斎藤先生の書かれた本や医学雑誌、またインターネットから得られた情報で一つ一つ母や友人の疑問や不安に伝えていった。その過程で、友人の一人（癌の病理をやっている医師）には「君のメールは斎藤先生に対するラブレターだ。医学的、技術的な解説の後ろに君の先生に対する熱い思いと絶対的な信頼を感じる。同業者としてジェラシーを感じる。」とも言われた。技術を扱うのは所詮人間なのだから、そこに信頼と尊敬がなければ自分をまかせようとは思えない。今思えば、一番の説得材料は初診を含め手術まで数回に及んだ斎藤先生とのミーティングから生まれた私の確信だったように思う。

私が欲しいものは3つあった。1.子宮を残すこと、2.なるべく小さい傷で横に切ってもらうこと、3.短い入院期間で退院できることの以上3つだった。そしてそれらを私に与えてくれるのは広尾メディカルクリニックしかないという確信は初診の日すでに芽生えていた。

その後、J医大でコピーしてもらったMRIやCTスキャン、血液検査などのデータをクリニックに持参して、先生にデータを前に詳しい説明をしていただいた。先生からは複数ある筋腫をいかに取って行くか、特に子宮の背中側で骨盤底近くの子宮筋腫を取り除く難しさの説明などを解剖図を参考にしながらしていただき、ビデオを見ながらの手術の説明も受け、あとは手術の日を心待ちにして当日を迎えた。

手術当日

月曜日の朝、クリニックに入り、私は第二例目の手術だったので夕方から始まり3時間半かかった。常に先生や看護婦さんと会話をしながら信頼感に満ちた時間だった。一番大きな筋腫を取り除かれた時は内臓が引っ張られるような感じがあり、その後息を吸い込むとまるで体の中を爽やかな風が吹き抜けていくような感じがした。先生が「筋腫が大きくて横隔膜がきよ上して腹式呼吸が出来なかったのが出来るようになったのだ。」とおっしゃった。

レーザーで蒸発する時の気体が湯気のように上がっているのが見え、汗びっしょりの先生と看護婦さん達が会話を交わしながらてきぱきと手術を進めて行く様子になんと良いチームだろうと感心した。

術後、病室のベッドに移されて心配していた母と会話をしていると時をおかずして先生が入ってこられ、手術の簡単な結果報告をしてくださった。筋腫は完全に全部取れ子宮は保存されたこと、卵巣も念のためチェックしたが異常ないこと、摘出物は病理検査に送られ二週間後に結果報告書が来ることなどを話してくださった。私は喜びが胸一杯に湧き上がってきたのを感じた。

術後経過とその後

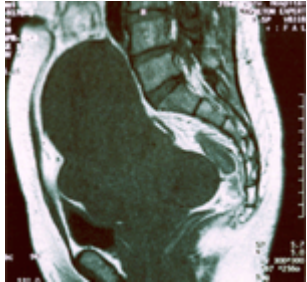
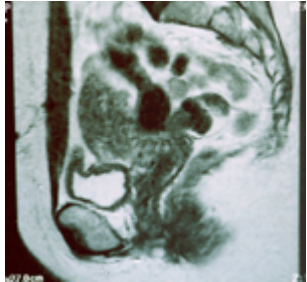
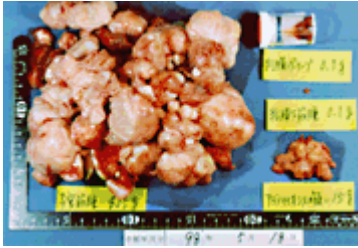
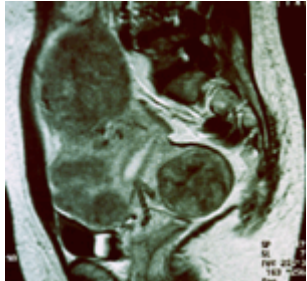
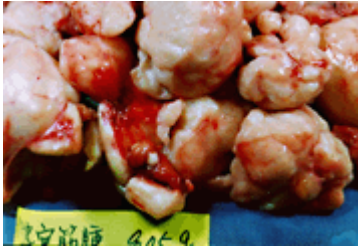
手術当夜は微熱、吐き気で苦しかったものの、次の日から立った。腹筋の痛みがひどく三日間は苦しかったが、四日目からは人間らしい動きに戻りこれなら土曜日の朝の退院は可能だという確信が持てた。

同じ日に手術を受けた女性とはすっかり仲良くなってしまい、お互いの回復の早さに改めてこのクリニックで手術を受けられた喜びを語り合った。同じ日に手術をした女性やクリニックで知り合った方々とはメールで病後経過を伝え合い励まし合い、退院しても何度か食事をとるような関係になれたのも、このクリニックの不思議な魅力のせいだった。

退院時には先生お手製の手術記録パート1というアルバムを頂いた。約二週間自宅療養をしたが、大学院には術後一週間で通い始めた。術後3ヶ月目には再度MRIを撮り、血液検査もして結果を広尾メディカルクリニックに持参し、斎藤先生と術後の経過に関するフォローアップミーティングを行った。ヘモグロビンの値は手術前の6以下から13.1に回復しており、過去十年の貧血から開放されたことを示していた。

追って手術記録パート2を送って下さるというお話に心待ちにしていると、それから二週間後の九月下旬にそれは届いた。退院時に頂いた手術記録パート1同様、MRIの説明と先生手書きの解剖図および部位の説明がほどこされた内容に加え、心のこもった先生の手紙が同封されていた。

「生まれ変わった体です。幸せを求めてください。」と先生は手紙の中で語っておられた。一年たち、私はそれをしみじみと味わっている。と同時に一人でも多くの同じ病気に苦しむ女性が救われることを祈ってやまない。

術前(pre-ope)のMRI	術後(post-ope)のMRI	摘出物
		
		

	術前 (pre ope)	術後 (post ope)
赤血球 (RBC)	4.66	4.8
血色素 (Hb) (g/dl)	13.9	13.5
ヘマトクリット (Ht) (%)	41.0	42
CA-125	47	30
備考	横切開、下腹部を横に 8 cm 出血量：434ml 摘出物： 子宮筋腫 (myoma) 805g 粘膜下筋腫 0.1g 内膜ポリープ (polyp) 0.1g 病理検査結果：以上全て良性	

「直感を信じ斎藤先生に託した事に間違いはなかったと今改めて感じています。」

松永洋子（49歳）

子宮筋腫とわかって

下腹に手をやると固まりに触れる。とても固くて、それもあり大きい。何だろうと思いつつも、その内市の子宮癌検診があれば行ってみようと思いつつも構えていました。

95年の夏、当時私の住んでいる地域ではめずらしい、レディースクリニックなる名称の医院へ癌検診に。結果は子宮筋腫、直径8cm、すぐに大きな病院へ行くようにと告げられ、この時初めて子宮筋腫という言葉に耳をしました。

市の検診であったためとても混雑していて詳しいことは聞けず、大きな病院に行くにしても筋腫のことを調べてからと思い、図書館に出向いて筋腫に関する本を何冊も抱え込んで持ち帰りました。かなりポピュラーな病気であること、発生した箇所によって名称の異なること、手術方法にもいろいろあること等々ある程度の知識を詰め込んでいざ大学病院へ。

1軒目では、「直ぐに手術する日を家族と相談して決めてきなさい」との言葉に「子宮を取るんでしょうか」と私が聞き返すと「当たり前でしょう」とカルテに目を落としたまま私の方をみることもなくその医師は怒ったように言い放ちました。

2軒目では、「年齢が年齢だから切るのが嫌なら別にいいよ。半年に一度検診に来なさい、様子を見ていきましょう」と。その言葉にああ別に切らなくてもいいんだと一安心。

この頃はまだ筋腫による辛い症状というものが全く無く手術をすることなどまだ考えていませんでした。それに本による知識で生理がなくなると筋腫は自然に小さくなるものだと思っていたので、2軒目のほうの医師の意見に従うことにしました。

ただ何冊もの本のなかで斎藤先生の『子宮を残したい10人の選択』は私に強烈な印象を与えてくれました。もし手術をするようなことになれば、かなり大きな筋腫でも子宮を残せるこの広尾メディカルにお願いすればいい、何も心配は要らないと自分のなかでは決着をつけいつもの生活に戻っていきました。

症状が悪化していく

しかし安泰の状態は長くは続きませんでした。28日周期をきちんと守っていた生理が25日、23日、20日と間隔を狭めていき、その量もどんどん増えてきました。厚いナプキンをして1時間ももたず、外出は近所のスーパーへ行くのがやっとの状態でした。下半身がだるく横になりたいと思いつつも、流れ出てくるのが心配で休むことも出来ずにいました。

仕事のある日はとても辛く、頭の中はトイレのことばかり、ある時溢れ出たソレはズボンの中の足をつたって白いスニーカーをみるみる赤く染めたのです。職場で洗濯をしたことも何度かありました。（男性もいますので気づかれないようにするのが大変でした）

夜はどれだけ重装備をしても、気持ちの悪い濡れた間隔で目が覚め、まだ夜も明けやらぬ風呂場でシーツやパジャマを洗い、情けなく思ったのは1度や2度ではありません。いつやって来るか分からない生理に予定は一切立てられず、生理如きに振り回される日々に限界を感じ始めました。

いよいよ広尾メディカルにお願いする日が来たようです。それから後、まあいろいろありましたが、周囲も私の固い決意の前では何を言っても無駄だと察したらしく、最後には家族の熱い声援を受けることになり一人横浜へと向かいました。

2年後の決断

広尾メディカルに電話を入れたのは、筋腫と分かってから2年後のことです。この年齢になっても子宮を取るとは考えられず、他の病院へ行くことも考えられませんでした。子宮がなくなると女でなくなるなんてナンセンスな考えは毛頭持ち合わせておりませんが、やはり斎藤先生の本の影響が強かったのだと思います。

そして検査の日、筋腫は直径10cm以上に成長、子宮の大きさは妊娠6ヶ月に相当する大きさでした。それにヘモグロビン（血色素）が5.7でした。「よくそれで生活してるね」と言われたのを覚えています。この日は口数の少ない先生という印象を受けましたが、それだけに穏やかな優しさ大きな自信に溢れた方だと思いました。

手術の日が決まったあとはルンルン気分、修学旅行を待つ子供のように・・・でも、術後時折やってくるあの痛み（陣痛の末期のような）をこの時は知る由もありませんでした。とは言っても2・3日の我慢ですが・・・。

所要時間2時間、このクリニックでは短い方ではないでしょうか。腰椎麻酔と硬膜外麻酔ですので幸か不幸か意識ははっきりしたもので、筋腫をもぎ取られるあの感覚は今も鮮明です。後半には震えがきて痙攣のように身体が脈打つのです。おさえようとしてもおさえられず「終わりましたよ」と告げられた時は「助かった！」と思ったほどです。筋腫590g、ポリープ10g、その他10g、その日のうちに病室に持ってこられ、「見る？」と言われましたがあまりにも生々しく「今は結構です。元気になってからにします」と答えました。

これだけの大きさになるには10年かかるとのことですが、なぜこの大きさになる前にいつも受診していた癌検診で見つからなかったのか不思議です。ともあれ無事終わり、入院生活はとても楽しいものでした。人間の身体の回復力に興味津々で日に日に良くなっていくのはとてもうれしい事でした。

手術後元気になって

手術から1年半がすぎました。自慢するようで恐縮なのですが、手術をしたことで改善されたいくつかの事柄を伝えたいと思います。


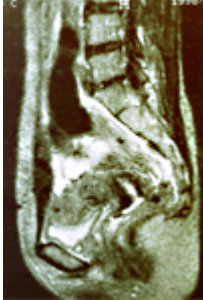
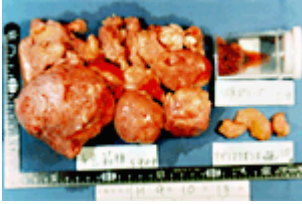

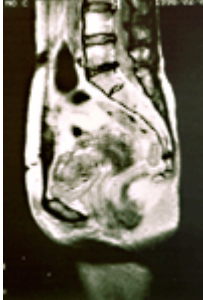

生理が正常（こんなに少ないの？）になったことはもちろん、肌が綺麗になったこと。以前の私は顔に吹き出物がいっぱい、なぜこの年になってもと、うらめしく思う日々でした。貧血で顔色の悪い上にこの吹き出物ですからとても素颜では外出できません。筋腫のせいとはつゆほどもおもいませんから、皮膚科にも通いました。しかし、いっこうに良くなりません。斎藤先生にも「あの頃は土色の顔をしてたね」と言われたほどです。吹き出物の痕を「そのキスマークどうしたの」とからかわれたのも覚えています。

でも今は人並みの顔色を取戻し、吹き出物もでなくなりましたし、ヘモグロビンも13とかつて経験したことのない数値を維持しています。なんと長年体質だと思っていた貧血が、いとも簡単に治ってしまったのです。

以前ジョギングをしていた時期があったのですが、だんだん苦しくなってきたとうとう止めてしまいました。しかし、術後3週間たったころ、ムクムクと走りたい衝動が湧いてきて、近くの公園を走り始めました。1周300mはあるかと思われる公園を一気に8周走りましたが、なんと苦しくありません。そのまま家に駆け上がり、夜の10時をまわってと思いますが、広尾メディカルに電話をしていました。「先生、走れたんです！」と、先生にすればなんのことも分かりませんよね、でもそれくらい嬉しかったのです。それ以来今も走っています。

そして痩せたこと。退院する時点で4キロ近く減少、今もそれはほぼ替わらずにいます。先生はホルモンの関係でしようと言われましたが原因はなんであれうれしいおまけでした。

乗り物にも酔わなくなったように思います。この年齢では、子宮をとることにさほどこだわらない方も多いと思いますが、私は自分の直感を信じ、いえ、厳密に言えば何冊もの本から得た情報・医師の診断・説明・対応などからの判断ですが。そして斎藤先生に託した事に間違いはなかったと今改めて感じています。

術前(pre-ope) のMRI	術後(post-ope) 3ヶ月のMRI	摘出物
		
		

	術前(pre ope)	術後(post ope)
赤血球(RBC)	319	484
血色素(Hb)(g/dl)	8.4	13.0
ヘマトクリット(Ht)(%)	27.4	40.0
CA-125	25	
備考	横切開、12cm 4ヶ月前の血色素(Hb) : 5.7 摘出物 : 子宮筋腫(myoma) 590g 腺筋症 10g 内膜ポリープ(polyp) 10g 病理検査結果 : 全て良性	

「腺筋症を克服して別人のよう。質問があればEメールをください」

坂本志津子（33歳）

ひどかった貧血

広尾で手術を受けるまでの私は、ものすごい貧血でした。駅や会社の階段を上ろうとすると、心臓がバクバクと悲鳴をあげ、冷や汗がドッと吹き出して、とても最後まで上れませんでした。1年中夏バテのようにだるく、会社の友人たちからも「体力がないねえ」と言われ続けました。みんなで行ったキャンプでも、立ち働くとすぐに疲れてしまうので、みんなが水汲みに何往復もするところを1回だけで免除してもらう有様でした。

会社の健康診断の結果は、いつも「貧血がひどいから、すぐに病院に行くように」と言われました。ヘモグロビン値が4.6ということもあり、疲れやすいのは貧血のせいだとは思っていましたが、その貧血が腺筋症による大量の出血が原因だとは全く思いもよりませんでした。

スプレキュアを使用

生理の異常に気づき始めたのは24歳の頃でした。生理になると下腹痛と出血がひどく、心配になって近くの国立〇病院の婦人科に行ったのもこの頃です。診断の結果は内膜症とのことで、スプレキュアを使うことになりました。半年使って半年休む、という内膜症の治療の定番です。たしかにスプレキュアを使っている間は生理が止まっているので痛みと出血からは解放されていますが、絶えず頭がボーっとして、物忘れすることが多かったのは、スプレキュアの副作用だと思います。長く続けると肝臓に負担をかけるということも気になっていました。

半年たってスプレキュアを止めると出血がものすごく、痛みも並大抵ではありません。痛み止めのボルタレンを病院からもらっていましたが、それもあまり効かず、睡眠をとるために坐薬を入れても、ほんの少し眠ると痛みでまた目が醒めてしまうという状態でした。寝るときにはナブキンの上から大人用の紙オムツをしていましたが、それでも布団を汚してしまうこともあり、夜中に布団の汚れを始末するときなど痛さと止まらない出血で泣きたくなくなるほどでした。吐き気もあって、食欲もまったくありませんでした。

デリカシーのない大病院

出血が止まらずフラフラになると、入院用の荷物を持って〇病院に駆け込み、入院させてもらったことも1度や2度ではありません。数日間入院して増血の治療を受けると身体がラクになるのです。

こんなふうで〇病院の医師には長いことお世話になっていましたが、症状は重くなる一方で、MRIとCTの検査の結果「子宮を取るしかない」と言われたのは32歳のときでした。

国立病院の医師というのは、すさまじい忙しさです。診察のときにじっくり話をすることなどとても無理で、廊下ですれ違って小走りでも先を急いでいるので話しかけるきっかけもありません。廊下1本を隔てて、片方は新生児の泣き声に包まれ、もう片方の病室には子宮を取った人が横たわっているというのも残酷なものです。

「なんてデリカシーがないんだろう」と通院中に何度も感じてきましたが、長い間経過を診てきて最後にはいとも軽々と「子宮を取ってしまえば楽になりますよ」という医師の言葉がどれほど患者を苦しめることになるか、そのデリカシーのなさに腹が立ちました。このことは多くの大病院に共通することだと思います。

医師に広尾のHPを見せた

インターネットのデザイナーという仕事柄、広尾のホームページは前から知っていました。内膜症に関する情報を得たいと思って検索したところ、最も充実した情報を開示していたのが広尾のホームページでした。

「子宮を取るしかない」と言われて、次の診察日に「子宮保存手術をしているこういうクリニックがあります」と広尾のホームページをプリントアウトして持って行き、医師に見せました。「広尾？知らないなあ」「レーザーによる子宮保存手術？うーん、どうかなあ」というぐらいの反応しかなく、それ以上の話には発展しませんでした。

した。「先生もホームページにアクセスしてみてください」とお願いしましたが、はたして読んでくれたでしょうか。

大病院の医師は忙しさにかまけて不勉強だ、とそのときに思いました。インターネットによって世界的な規模の情報が得られるこの情報化時代に、自分の診療技術以外に関心を示そうとしない、他の医療機関の情報をチェックしようとする医師の閉鎖性を感じるのは私だけでしょうか。

Eメールでの質問に応じます

国立〇病院での治療に見切りをつけて、広尾で手術を受けることを決心したのは、玉城薫さんから電子メールでいろいろな話を聞いたことが決め手になりました。玉城さんは腺筋症を斎藤先生の手術で克服された元患者さんで、このホームページの体験談にも登場しています。体験談を読むうちに私の症状とぴったり同じなので電子メールでいくつかの質問を書き送ったところ、すぐに丁寧なお返事をくださったのです。

斎藤先生の手術によって痛みと大量の出血から解放されたこと、健康を取り戻して術後3週間でヨットで海上に出たことなど、ホームページで語られていることが真実であることを確認し、広尾への信頼感を深めました。

玉城さんとのやりとりによって決断した私自身の経験からも、術前・術後について分からないことやもっと詳しく知りたいことがあれば、経験者に聞くとよいと思います。

私の電子メールのアドレスは、sakamoto@hh.ij4u.or.jpです。お聞きになりたいことがあれば、どうぞなんなりとメールをください。

すべての病気にオサラバした

手術をしたのは98年8月24日ですから、ほぼ10ヶ月がすぎました。

玉城さんから聞いていた通り、生理のときの出血量は100分の1ぐらいに激減しました。下腹部がちょっと重苦しいような感じはありますが、もちろん痛み止めなどは使っていません。

しょっちゅう風邪をひいていたのが、術後は風邪をひかなくなりました。いつもだるかったのも、めまいもなくなって、すべての病気にオサラバした気分です。今になって、腺筋症がすべての症状の原因だったことがよくわかります。





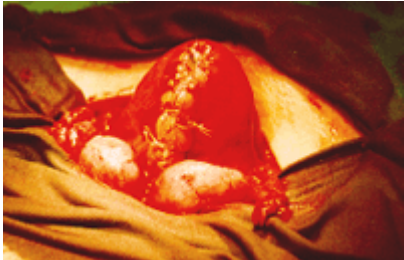
階段を上ったり、バスと電車を乗り継いで出かけることもできるようになりました。なにしろ手術前は、痛みと出血がひどくて仕事に出かけることもできず、やむを得ず外出するときも車で移動するしか方法がありませんでした。「もう一生、車の生活しかできない」と思っていたのが嘘のように、今はどこまででもバスと電車で行かれています。1ヶ月間休みなく動くことができ、旅行などの計画を立てるときにも生理のことを心配しなくて済むようになりました。手術前の自分を思うと、まるで別人のようです。

やさしい斎藤先生

忘れられない思い出があります。貧血がひどかった私はこれを改善しなくては手術を受けられないため、手術前の土・日に鶴見の佐々木病院に入院して輸血を受けました。

手術前の不安に加えて馴染みのない病院で心細い思いをしていると、斎藤先生が果物などを持ってお見舞いに来てくださったのです。栄養をつけて手術に臨むようにとのお心遣いですが、まさか執刀してくれるドクターが手術前にお見舞いに来てくださるとは思いもよらず、とてもびっくりしました。

このときの「やさしい先生だなあ」という思いは、入院中も退院するときも、そして退院後にも折にふれ感じてきました。お世話になったお礼の意味でも、広尾のホームページにアクセスした人で広尾のことをもっと聞きたいという人のお役に立てればと思っています。

術前(pre-ope)のMRI	術後(post-ope)3ヶ月のMRI	摘出物
		 
<p align="center">術後の保存子宮</p>		
		

	術前(pre ope)	術後(post ope)
赤血球(RBC)	327	506
血色素(Hb)(g/dl)	8.2	14.4
ヘマトクリット(Ht)(%)	26.3	43.2
CA-125	80	10
備考	横切開、10cm 麻酔：硬膜外 摘出物： 腺筋症 120g 内膜ポリープ(polyp) 0.1g 病理：各々悪性ではない 出血量：188ml 術前輸血：800ml 術後のMRIは術後3ヶ月のもの	

「鈍感なまま、自分を納得させないでよかった！」

Miss.M.N (36才)

大きな塊が筋腫だとわかるまで

30才を過ぎたぐらいからでしょうか、お腹をおさえると子宮があるあたりに固いものがあることに気がついていたのですが、生理も普通だし、お腹が痛むこともなかったので気にしないようにつとめていました。

2年前の夏頃、固い塊が急に大きくなったように思いました。特に生理前はお臍の下まで固くなって、これは尋常ではないとおもいながらも、生理が終わると随分小さくなるので症状もないし、また気にしないようにつとめていました。子宮の病気であれば、何か症状があるはずだと思い込んでいたのです。子宮筋腫で全摘した方の話を聞く機会があり、もしかして私もそうなのでは...と、そのとき初めて自分が子宮筋腫なのではという疑問が湧いてきました。この塊が筋腫だとすると、かなり大きいぞっ、どうなるんだろうと...。頻尿の症状も出てきていて、夜中に一度はお手洗いに起きていました。

すぐに近くの総合病院の内科に受診しました。きっと、婦人科だろうと思いつつ内診がいやでとりあえず内科で見てもらいました。妊娠の可能性がないなら、筋腫だろうという診察だったと思います。一週間後に婦人科の診察の予約を入れて帰ってきました。

この一週間の間に筋腫についてインターネットで調べてみました。そこで初めて広尾メディカルホームページにたどりつき、私と同じ症状のない方で、大きい筋腫の核出手術に成功された方の体験談を読んで勇気づけられました。ホームページに質問のメールを出すと、斎藤先生からすぐにお返事をいただきました。症状のない筋腫はよくあることで、無症状が故に筋腫が大型してもわからないということでした。そこでもっと勉強をして、先生に手術していただくべきでした。斎藤先生でないとなしえない手術であるというのが解っていなかったのです。

安易に大きい筋腫でも、核出手術ができるんだと喜んでいました。先生に手術していただくまで、1年間の遠回りをし、出口のないトンネルに突入してしまいました。<

安易な決断

総合病院の婦人科の診察はエコーでみていただきました。赤ちゃんの頭ぐらいの大きな筋腫がエコーの画像に写っていました。筋腫だと確信していたものの、ショックでした。

すぐにMRIを撮っていただくと、筋層内に出来ている、核出手術が難しい筋腫でした。またまたショックでした。ホルモン治療をしても、小さくなる可能性は少ないとのこと、年明けに手術をするかどうか返事することになりました。悩んだ据え、思い切って手術をしていただく事にしました。アトピー性皮膚炎の症状もありましたので、ホルモン治療で悪化するのが怖かったですし、はやくスッキリしたいと思う気持ちが強く、何とか大丈夫ではと甘く考えていたのです。

お腹を開いてみて温存が難しいようであれば、そのまま閉じるということで、手術に踏み切ることにしました。術前の検査など準備を進めている時に、母が私を思いとどまらせてくれました。子宮の手術の難しさ、出血多量になった場合は全摘をまぬがれない事を主治医の先生よりうかがい、手術を反対され、ホルモン治療を勧められました。今では、思いとどまらせてくれたことに、ほんとうに感謝しています。

無駄なホルモン治療の長い日々

わずかな期待を込めて、ホルモン治療をすることに決め、スプレキュアを半年続けました。2ヶ月に1回、検診をしエコーで見ていただきました。一回りぐらい小さくなっていったときは、嬉しかったです。このままどんどん小さくなっていくのではと少し期待をしてしまいました。

核出手術が難しいのは変わらない。手術をしても大きい筋種の場合は全部とり切れず再発する可能性が高い。この頃は、このまま大きくなるのであれば、症状もないしこのまま筋腫と共存していこうかとも思っていました。でも、共存していくにはたくさんあきらめないといけないことがあります。妊娠しても、流産になる可能性が高い。どこまで大きくなるかわからない筋腫を抱えていることのストレス、不安。全身の倦怠感。ホルモン治療の副作用。とりあえず、ホルモン治療の結果が出るまで、あまり考えないようにつとめるようにしていました。

半年の治療が終わり、副作用がでていないかの検査を行いました。すると、60才の骨密度になっていました。ショックでした。これ以上、ホルモン治療はできないので、しばらく様子を見ることになりました。

10月半ば頃、エコーで見ていただくと、元の大きさに戻っていました。半年間もかかって小さくした筋腫は2ヶ月で元に戻ってしまいました。生理の量も増えてきましたし、まだまだ大きくなるような感じがしました。

また、ホルモン治療をすることになりました。今度はリュープリン注射です。副作用が出にくいように考えてくださったのですが、不安が一杯でした。いつまで続くかわからないホルモン治療で骨がボロボロになってしまうのではと...

出口のないトンネルです。病院からの帰り道は、いつも辛いものでした。

トンネルの出口が見えた！

もう、全摘覚悟で手術していただくしかないかと悩んでいたのですが、斎藤先生に見ていただいてからでないと思えば後悔すると思ひ、最後の望みをかけて診察していただくことにしました。一年前は手術に反対だった両親も、今までの経過を見て、後悔することのないようにと賛成してくれました。

11月4日に初診の予約を入れ、MRIの画像と紹介状を持って、母と一緒にうかがいました。斎藤先生はMRIの画像を見るとすぐに、「大丈夫ですよ。子宮は残せます。」とってくださいました。あんなに難しいといわれていた筋腫なのに、夢のようでした。術後2日目の方にお話を聞かせていただき、安心して手術の予約を入れる事が出来ました。年内の12月14日にきめ、横浜見物をし、晴れ晴れとした気持ちで帰路につきました。

トンネルの出口が見えてきた、これからのことを考えられる毎日がとても嬉しくて、手術日まではあっという間でした。今まで見ていただいていた、主治医の先生に報告に行くと、「頑張ってください」とのお言葉をいただき、術前の検査も快く引き受けてくださいました。

不安を感じなかった、手術、入院生活

手術前日に飛行機で横浜に入り、予約していただいていたホテルに母と一泊しました。ベッドに横になって、出っ張ったお腹をなでながら、この大きな塊とも明日でおさらばできるかと思うと、嬉しくて嬉しくて、術前の不安はあまり感じず、熟睡することができました。

手術は3時間程でしたが、麻酔がよく効いていて、ぼんやりとウトウトしている間に済んでいました。汗びっしょりになってらっしゃる先生の姿を見て、大変な手術をしていただいていたのだと自覚するくらい、3時間の手術時間は苦痛ではありませんでした。筋腫670g以外に、内膜ポリープ0.1g線筋症の疑い部分5gを取っていただき、丁寧に手術していただけた事をほんとうにありがたく思いました。

術後の夜の痛みは、私の場合ほとんどなかったのですが、麻酔からくる吐き気と、膀胱に尿が溜まっている感じがつらく、あまり眠れませんでした。2日目に尿管を取っていただいからは、麻酔からの眠気もとれ、随分楽になりました。

すぐに室内をゆっくり歩くことができ、自分でおトイレにいけたときに、安心したのか喜びがしみじみ湧いてきました。それからは毎日よくなっていき、無事に土曜日に飛行機で大阪まで帰ることができました。先生に空港まで送っていただけたので、後は一人でも困ったことはなにもありませんでした。迎えにきてくれていた両親も元気な私をみて、びっくりしたようです。

先生、広尾の皆様はこちらが不安になる前に、さりげなく心遣いしてくださいませ。精神面でもさりげなく声をかけて下さり、安心させてくださいました。広尾メディカルでの入院生活はほんとうに快適で、家に帰った時は何か寂しく感じるくらいでした。

筋腫が消失し、健全な子宮を残していただけた

3ヶ月後のMRIでは筋腫は消失し、先生からも安心して大丈夫との診断をいただきました。筋腫とはおさらばできました。


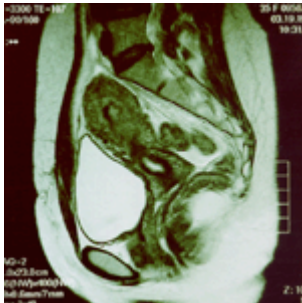
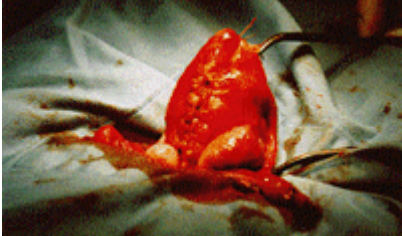

大きな筋腫を持っていた私の場合、普通の手術だと成功したとしても、再発を気にしなくてはいけない状態だったと思います。おさらばできたのは、斎藤先生に手術していただかなければなかったことです。今では、大きい筋腫で手術が難しかった事が、かえってよかったように思えます。斎藤先生の手術を受けることができ、ほんとうに幸運でした。

自分を納得させないでよかった！

術後、半年が経った今、ほんとうに健康です。

手術前は生あくびが出て、体がだるくてしょうがなかったのですが、体も軽くなり、疲れにくくなりました。アトピーの症状もどうしてもよくならなかった部分を普通の肌に戻すことができました。もうちょっとで、アトピーともおさらばできるかもしれません。傷口もきれいになってきました。

筋腫があった事で、体にはだいぶ負担をかけていたようです。今まで普通だと思っていた事が、実は健康な状態ではなかったのだと、健康になってみて始めてわかりました。先生に手術していただかなければ、ずっと、鈍感なまま、自分を納得させて、一生すごしていたと思います。

<p>術前(pre-ope) のMRI</p>	<p>術後(post-ope) 3ヶ月のMRI</p>
	
<p>術後直後の子宮</p>	<p>適出物</p>
	

	術前 (pre ope)	術後 (post ope)
赤血球 (RBC)	461	499
血色素 (Hb) (g/dl)	13.9	14.9
ヘマトクリット (Ht) (%)	40.2	44.4
備考	横切開、8cm 出血量：331ml 摘出物： 筋腫 670g 腺筋症 5g 内膜ポリープ (polyp) 0.1g 病理：全て良性	

「インターネットで広尾を知って救われた。Eメールでの相談に応じます」

中村佐保子（27才）

間もなく術後1年

昨年の7月13日に、斎藤先生に子宮筋腫の手術をしていただきました。摘出した筋腫1,300グラムに子宮内膜ポリープ5グラム。大きな子宮筋腫でしたが、元気に術後1年を迎えています。

子宮筋腫は中高年の女性の病気と思われがちですが、決してそうではありません。20代でも私のように大きな筋腫ができてしまうことは、広尾を訪れたこれまでの患者さんの例からも珍しいことではないのです。

大きくなってしまった子宮筋腫の場合、その治療法は全摘手術が一般的です。年齢や子供の有無にかかわらず大部分の病院では全摘が行われていますが、もし、それしか方法がないのだとしたら、私のような若い患者はどのようにして術後の長い人生を生きていったらよいのでしょうか。おそらく自分の将来に希望を見いだせず、鬱々とした思いで暮らすことになるでしょう。

私はインターネットで広尾を知り、全摘手術を免れることができました。広尾のホームページでいろいろな情報を得たことで、あまり悲観的にならずに自分の病気と向き合うことができました。インターネットをやってよかった、とつくづく思います。

以下に私の体験談をお話しますが、お読みになって何か質問などありましたら、Eメールでご連絡ください。メールアドレスはsahoko77@yahoo.co.jpです。インターネットを介して救われた者として、皆さんのお役に立てれば幸いです。

献血に行ったらわかった貧血

忙しかった仕事が一段落して献血に行ったところ、「貧血がかなりひどいから一度診てもらったほうがいい」と言われました。もちろん、そういう状態では献血はできません。

忙しかったから、そのせいかなあ...と思いながらも近所の産婦人科に行ったのは、生理のことが気になっていたからです。中学生の頃から生理の出血量が多かったのですが、それがますますひどくなって、お腹が張るような感じもあったので、どうも生理と関係がありそうな気がしたのです。

近所の産婦人科の医院で子宮筋腫であることはすぐにわかりましたが、私の年齢が若いこと、そして筋腫が大きいことを心配した開業医は、大きな病院へ行くことを勧めました。

次に行った病院はやはり家の近くの中規模のK病院です。ここでMRIの検査を受け、筋腫が相当大きなものであることが確認されました。婦人科の女医さんはとても親身に診てくれましたが、筋腫が大きいこと、浸潤が見られて肉腫の疑いがあることなどから全摘を勧められました。

大学病院では「即入院。そして全摘」

子宮筋腫であることがわかって、「J医大の婦人科の医局に勤めている友人に相談したところ、「一度、うちの病院でも診てもらったら」ということになりました。J医大は日本でも有数の大学病院です。

K病院の女医さんに、「大学病院でも診てもらいたいので」と話すと、快くMRIのコピーを出してくださいました。病院によってはMRIなどの検査データのコピーを出したがるらないところも多いと聞きますが、K病院はこの点でもとても親切でした。

MRIのコピーを持ってJ医大に行きました。ここでは診察する医師の後ろに若手の医師が控えていて診断結果をカルテに書き込むのですが、私を診てくれた医師は「アダルト・ヘッド大」と若い医師に告げました。それが筋腫の大きさを意味していることはすぐにわかりました。

そして、私には「すぐに入院の手続きをしてください。全摘手術をすることになります」と、入院手続きの窓口に戻るよう指示しました。

「全摘」という言葉にショックを受け、言われた通りにいったんは入院の手続きに向かったものの、「ここで手術することを決めちゃダメだ」と思い直して診察室に引き返し、「もう1カ所行ってみたい病院があるので、すみませんがMRIのコピーを返してください」と申し出ました。

いよいよとなれば広尾がある...

もう1カ所行ってみたい病院、それは広尾メディカルクリニックでした。K病院に通っている時もJ医大に足を運んだ時も、頭の片隅にはいつも広尾のことがありました。

近所の開業医で最初に子宮筋腫がわかった時にインターネットで検索して広尾のことを知って以来、広尾は「最後の砦」のような感じで心の中から消えることはありませんでした。いよいよとなったら広尾がある...、そういう気持ちがあったからこそ、J医大で医師の言うままにならずに引き返すことができたのだと思います。

広尾のホームページの体験談レポートに登場しているのは、いずれも重症の子宮筋腫や子宮腺筋症の患者さんばかりです。私以上に大きな筋腫の方もいます。

それなのに、斎藤先生の手術によって皆さん病気を克服され、しかも子宮がちゃんと残っている。この事実を知っていたからこそ、自分の症状を冷静に受け止めることができたし、J医大での手術を拒否することができたのだと思っています。

巡り合わせというのは不思議なもので、インターネットで広尾を知った後に、友人のところへ遊びに行ったらたまたま立ち寄った本屋で、先生の本『子宮をのこしたい』を見つけました。アッ、あのホームページに載っていた本だ、とすぐに買いましたが、今は書店に並んでいることはめったにないといわれるこの本と郊外の私鉄駅の本屋で出会ったということにもご縁を感じています。

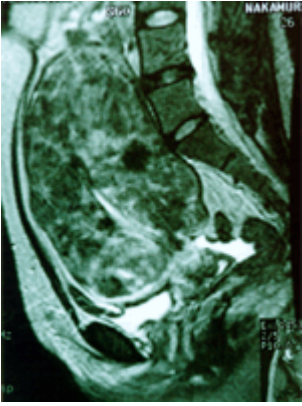


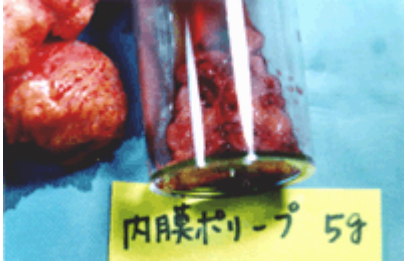
先生の説明に母も納得

「こんな大きな筋腫だもの、いろいろと自覚症状があったでしょう」と聞かれることがありますが、生理の時の出血が多いということ以外、それほど強い自覚症状はありませんでした。生理痛もほとんどなかったし、便秘や頻尿などもなかった。だから気づかないうちに大きくなってしまった、ということもできます。

強いて言えば、お腹が固いなあ、ということでしょうか。自分のお腹をさわって、次に母のお腹をさわってみると、その感触が全然違うのです。1,300グラムもの筋腫ができていたのですから固いのは当然なのですが、その事実をMRIの画像を見た時には「これはただごとじゃない。一刻も早く解決したい」と思いました。

広尾で手術したいと両親に話し、広尾での初診日には母が同行してくれました。K病院からもらったMRIのコピーを持参しましたので、その場で斎藤先生に見ていただくことができ、「大丈夫。筋腫もとれるし、子宮も残せるよ」と言っていただきました。ほかの患者さんのMRIも見せていただきながらの手術の説明に母も納得して、一番早い手術日に予約を入れました。それが1年前の7月13日だったのです。

あれから1年。今では病気だったことさえ忘れていたような毎日ですが、術後1年を迎えて、改めて子宮を失わずに元気に日々を過ごせる幸せを感じています。

術前(pre-ope) のMRI	術後(post-ope) 3ヶ月のMRI
	
適出物	
 <p style="text-align: center;">子宮筋腫130g</p>	 <p style="text-align: center;">内膜ポリープ 5g</p>

	術前(pre ope)	術後(post ope)
赤血球(RBC)	5.5	524
血色素(Hb)(g/dl)	13.4	14.6
ヘマトクリット(Ht)(%)	40.2	44.9
備考	切開部：横切開、14cm 術中出血量：586ml 摘出物： 子宮筋腫 1,300gm 内膜ポリープ(polyp) 5gm 病理：全て良性 ----- 以前他医で血色素(Hb)6.6	

このレポートは3部構成になっています。
1.手紙 2.病理組織検査報告書 3.体験談レポート

川崎 知加 (31歳)

斎藤先生はじめ病院の皆様

前略
先生、皆様いかがお過ごしですか？
私は一年前とはまるで別人の様に希望を持って生きています。東京医科歯科大学の先生による定期検診もその後異常はなく、とても安心してます。

本来ならもっと早くお礼を申し上げるべき所でしたが、末梢神経炎をわずらい、最近やっと普通に字が書ける様になり、風が冷たくなるに従い、1年前の事が昨日の事の様に思い出され、早くお便りをしなければと心のはやるまま筆をとりました。

今思えば、私は本当にラッキーでした。
この病院を知っているかいないかで一生が変わるのですから。そして私のそばにこの病院の存在を知る人が居たことを考えると、これだけは神様に感謝せねばと思っています。

そして今、一年前とまるでちがう私が元気で、女性としての自信に満ちあふれて毎日を送っています。

この私がこの様に生きていられるのは、斎藤先生に新しい命をいただいたからです。本当にそう思います。
新しいきらきらとした生まれたての命を先生は私に与えてくださいました。どんなにお礼を言ってもどんな言葉で表現してもこの気持ちは伝えきれないだろうと思います。

これ程尊い職業はないと言うのになぜ国、医学会が認めないのか、私にはまったく理解できません。
残念な事です。私の両親もまだ信じてはいない様です。本当に私の母の非礼を心からおわびいたします。ですが、何だかんだと言いながら、頭のかたいこの親が居なければ、あの手術は受けられなかったということも事実ではあります。

とにかく、私は自分の過去をふり返る事ができる余裕ができる程元気になったのです。広尾メディカルクリニックでいただいたのは、新しい命ばかりではありませんでした。その場に居たすべての人が私に優しさを教えてくださいました。

手術の日、その夜、何度も何度も鳴らしたナースコールにすぐ来てくださった白衣の天使さん。ただただ痛いと言う私の背中や腰を優しくさすってくれた手のぬくもりは一生忘れません。

本当にありがとうございました。本当にありがとうございました。
何度言っても言い足りません。言えば言う程しらじらしくなるかも知れませんが、言わずにはいられません。

先生、どうかこの仕事を一代で終わりにしないで下さい。21世紀に残してください。私がもらった命を、もっと多くの絶望の中に居る女性にも与えて下さい。与え続けてください。

これから先、私が結婚して、赤ちゃんが産まれたら、この命も先生が与えてくださった事になるのですね。
何だかとても不思議です。先生が私にひとつの命を与えてくださり、その命がまたもうひとつの命を生み続ける。そう考えると至福とはこう言う事なのかなんかと思ってしまうのです。

先生、ナースの皆さん、事務長さん、本当にありがとうございました。
そしてお体を大切にしてください。
家が近いから、その内ひょっこりお菓子でも持ってみなさんに会いに行くかも知れませんが、皆さんの笑顔に又会えるのを楽しみにしています。

とりとめのない文章で恥ずかしいばかりですが、少しでも私の気持ちが伝わる様であれば幸いです。
どうぞ皆様、そして先生、お元気で、尚一層の御活躍をお祈りいたします。

かしこ

川崎 知加

「病理組織検査報告書」

川崎知加 (31 歳)

病理組織検査報告書

受付1998年01月17日
決定1998年01月22日

病院名： 広尾メディカルクリニック 齋藤 敏祐 先生

患者名： 川崎 知加 殿 31歳 女

固定法 (1) 10%ホルマリン水

(2) 材料採取より固定投入まで

(イ) 直後 (時間)

(ロ) 未固定のまま提出

(3) その他

材料及び採取法： 臓器数： 1 臓器名： 筋腫核

臨床診断： (1) Myoma uteri

病理診断： Tumor mass : Leiomyoma

組織学的所見：

4 x 3 x 3 cm、15g、他 5 ケ、30g

細長紡錘形細胞が束状に配列、異型像を認めず、
degenerationもみられません。

no malignancy.

臨床診断： (2) Endometrial polyp

病理診断： Endometrial tissue : Endometrial atypical hyperplasia

組織学的所見：

endometrial glandは密に増殖、部分的にirregularな
配列を示し、核は腫大、クロマチン増量を示す
異型像がみられます。

(comment)

全体的にendometrial atypical hyperplasiaにて、部分的(表層に近い部)は高度な
異型を呈し、carcinomaに近い所見を認めます。

endometriumを再度curet tageして、検索させてください。

嚴重なfollowを望みます。

carcinoma (癌)

日本臨床研究所

「道は必ずあるはずですが、どうかあきらめないでください」

まるで「サギ」にあった様な想い

初めて産婦人科のドアをたたき、子宮内膜症と診断された。6ヶ月間のボンゾールホルモン剤治療のあと、まるで「サギ」にでもあった様な想いだった。

様態はますます悪くなっていた。「なぜ？」しばらく生理を止めていたのだから、最初はよくないのだろう。と勝手に考えていた。

ところが、良くなるどころか、悪くなる一方だ。「これはちょっとおかしい」と思った時はすでに、生理以外の時も下腹部の痛みが常に私を悩ませている状態だった。

そして次の産婦人科で、ゴルフボール程度の卵巣のう腫があると言われ、「10日間たって変化がなければ卵巣をとります。」とすぐに言われてしまった。

きつねにつままれた様な…。

私は医師と呼ばれる人の指示に従っただけなのにどうして？

そしてまた、別の産婦人科へ。また別の産婦人科へ…

どこへ行っても答えは同じ。「片方の卵巣はすぐにでも、もう一方もいずれは…」と同情する様な医師の視線が忘れられない。

助けてくれる病院はきっとどこかにはあるはずだ。

「とる」ことしかできないの？そんなはずはない。

技術大国のこの日本で、女性疾患に関する医療革新を誰も考えていないの？

きっとどこかにはあるはずだ。

私を救ってくれる医療がどこかにはあるはずだ。

私は祈る様な気持ちで、この想いにすがり、周囲に助けを求めたのです。「とらずに治してくれるお医者さまを知りませんか」と。

「とられる」とわかると、自分にとってどれだけ大切なものであったかが思い知らされる。私は一生子どもを産めない。子どもを産めない女性って、どんな風に生きて行くのだろう？

私は絶対にイヤだった。

ある物語で「男と女のちがいは何？」と言う質問に「女は子どもが産める。それが最大のちがい。」と誇らしげに答えた女の子の顔が頭をはなれなかった。私は女でありたかった。毎日祈るように情報を集めた。

遂に出会えた広尾メディカルクリニック

そして遂に広尾メディカルクリニックと斎藤先生に出会ったのです。同じ職場に居た方が、以前にこちらのクリニックのテレビ取材に立ち会われていたことを思い出して下さったのです。

「本当に？」「大丈夫？」不安で一杯だったけど、行って自分で確かめなければ、きっと後悔する。そう思い、斎藤先生に会いに行きました。

その先生の言葉こそまさに今の世に合った医師の言葉でした。「とらなくても治ります。子宮も卵巣もそのまま残るし、ちゃんと機能しますよ。」先生は自信に満ちあふれていました。多くの症例があった上での私の質問に対する解答はよどみなく、私の不安は次々晴れて行きました。

「地獄で仏！！」私は手を合わせる想いでした。

今、はつらつと毎日生きています

平成10年1月10日。雪が降りしきる朝入院。

そして手術。今はつらつと毎日生きています。

私は斎藤先生の勇気に感謝します。先生が居なかったら、と思っただけで背筋が冷たくなります。どうかこれからもこの医療を守って行ってください。

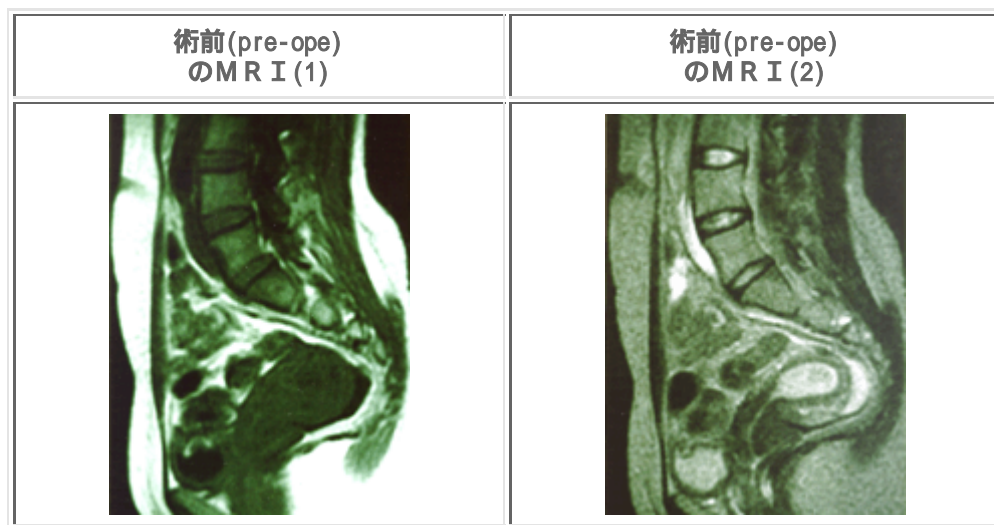
そしてこのホームページを読んでいるありとあらゆる方々へどれ程多くのお医者様の答えが「NO」であっても、どうかあきらめないでください。

女性の女たるべき機能を守ることは 人としての人生を守ることです。

そして、守ってくれる人がこの地球上に居ることを 知ってください。

道は必ずあるのです。

最後に、今こうして健康になるまでの間、励まし協力してくださった方々、何よりもこのクリニックを紹介してくださった方に心から感謝いたします。



cc : 長年にわたる生理過多、下腹痛、腰痛。S大学で卵巣・子宮全摘を告げられた。

	術前(pre ope)	術後(post ope)
赤血球(RBC)	432	510
血色素(Hb)(g/dl)	10.4	13.0
ヘマトクリット(Ht)(%)	31.9	42.1
備考	摘出物 : 子宮筋腫 30g 子宮内膜ポリープ(polyp) 5g 病理 : 内膜ポリープが癌に近い所見 本人の希望に沿い子宮を温存しながら精査を継続する為、東京医科歯科大学に紹介。	

「手術後5ヶ月で妊娠、間もなく出産です」

すべてが望み通り

ただ今、妊娠36週目で、間もなく出産です。

おなかの中で元気に動いている赤ちゃんは女の子で（妊娠5ヶ月目に斎藤先生がエコーで診て、教えてくださいました）、女の子が欲しかった私は今からわが子との対面を心待ちにしています。

広尾で手術を受けたのは今年の6月29日で、妊娠がわかったのはその年の年末。術後5ヶ月あまりで妊娠したことになります。妊娠中は特にトラブルもなく、順調に出産の日を迎えられそうです。

妊娠5ヶ月目に妊娠の報告をしに広尾に伺って、おなかの赤ちゃんをエコーで診ていただいたときに、「どっちが欲しいの」と先生に聞かれ、「女の子」と答えると、「あなたの望みは全部叶ったじゃないの」と先生に言われました。その通りなのです。手術後のベッドの上で「来年の今ごろはもう赤ちゃんが生まれているか、妊娠しているといいなあ」と願い、「赤ちゃんは女の子がいいなあ」と夢に描いたことがもうすぐ現実になるのです。

挙式2ヶ月前に不正出血

子宮に病気があることがわかったのは、平成8年の9月。挙式の2ヶ月前でした。不正出血があり、気になって近所の病院で診てもらったところ、「子宮が丸く膨らんでいる。おそらく内膜症か子宮筋腫でしょう」とのことでしたが、不正出血のほかにはこれといった自覚症状がなかったため、「しばらく様子を見ましょう」ということになりました。

結婚を2ヶ月後に控えてのこの診断は、とてもショックでした。子宮筋腫は中年以降の病気だと思っていましたし、母方の伯母も筋腫で子宮を全摘してあるので、これは困ったことになった、と落ち込んでしまいました。

私の結婚を心から喜んで挙式を楽しみにしている両親には、とても話すことができませんでした。打ち明ける相手は彼一人しかいませんでしたが、男性にとって子宮の病気は理解を超えるものようで、「僕たちは運が強いから大丈夫だよ」とあくまで楽観的でした。彼が深刻に考えなかったのはありがたいことではありましたが、私自身は彼のように楽観的になることはできず、もし子供ができなかったらどうしよう、とそればかり考えていました。

すぐに妊娠、そして流産

ところが、結婚して4ヶ月目に思いがけず妊娠していることがわかりました。その時の気持ちは、「な～んだ、筋腫があってもちゃんと妊娠するんだ」という安堵と、「妊娠すると内膜症は治るというから、これをきっかけに病気も治るかも...」という期待が入り交じったものでした。

そんな期待もつかの間で、妊娠8週目で流産。ショックではありましたが、まだ結婚したばかりで暫く二人だけの生活をしたい気持ちもあって、「今回のことは、妊娠できる子宮であることがわかっただけでもよかった」と、どこかホッとする気持ちもありました。近所の病院の医師からも流産の原因については特に説明はなく、「若いし、またできますよ」と言われ、私もそんなふうに思っていたのです。

しかし、結婚早々の妊娠と流産のあと、また不正出血に悩まされることになりました。毎月の生理にも変化が現われて、月を追うごとに生理の量が増えて、最も量の多い2日目には貧血でめまいがするほどなのです。

生理がひどくなった原因は、妊娠によってホルモンの分泌が変化して子宮筋腫が大きくなってしまったためでした。すぐに流産してしまったのに、筋腫の方は妊娠が引き金になってどんどん育ってしまったのです。

精神的な苦痛

どうしよう、どうしよう、と思い悩みながらも、誰にも相談できないまま日が過ぎていきました。母に話せば心配するに決まっているし、友達にも言う気になれず、自分一人で悶々と悩んでいました。このまま放っておいてよいのだろうか、もしかしたら妊娠できなくなるのではないだろうか、という不安が絶えずつきまとい、精神的に追い込まれていく日々でした。

そうして1年。ひどくなる一方の生理と病気への不安に解決の糸口を与えてくれたのは、自宅のパソコンにつながインターネットでした。子宮筋腫と内膜症についての情報を集めようとアクセスして、広尾のホームページに出会ったのです。

ホームページには手術後に妊娠、出産された元患者さんの体験談が載っています。これを読んで、私は跳び上がりたいほど嬉しくなりました。「これで赤ちゃんができる！！」と思ったのです。

早速、広尾に電話をして初診の予約をとり、足を運びました。広尾が住まいからそれほど遠くないという点も幸運でした。

初診のときの斎藤先生の言葉は忘れられません。「子宮がリンゴぐらいの大きさになっている。それもリッパな富士で、紅玉じゃないよ。この子宮じゃ赤ちゃんはできないよ」とハッキリおっしゃるのです。以前に近所の病院で言われた「若いし、またできますよ」とは何という違いでしょうか。

心待ちにした手術

鶴見の佐々木病院でMRIなどの検査を受けたときも、手術日を待つ間も私は嬉しくてたまりませんでした。手術が終われば、何の迷いもなく妊娠に向けて一直線に進んでいけるからです。

手術日は今年の6月29日。筋腫245グラムと内膜ポリープ5グラムを摘出していただきました。手術前の最後の生理のときはナイト用ナプキンが4枚重ねてもしみ出るほどの出血でしたが、この多量の出血は内膜ポリープからのものだったと先生から聞きました。

手術には夫と妹が付き添ってくれました。筋腫と内膜ポリープを摘出したところで夫が手術室に呼ばれ、病巣部分を切り取って子宮を保存したこと、卵巣は正常であることなどの説明を受け、その場で術中の子宮と卵巣を確認しています。退院時に先生からいただいた手術の経過を記録したファイルには、夫が肉眼で見たこの術中の子宮のカラー写真もおさめられています。

ファイルには術前のMRIの画像や術中の摘出物の写真のほか、先生の自筆による手術の経緯が書かれていて、これを見た夫は「ここまで患者に情報公開するのはスゴイことだ」と驚いていましたが、私も全く同感です。

「妊娠」を示すサイン

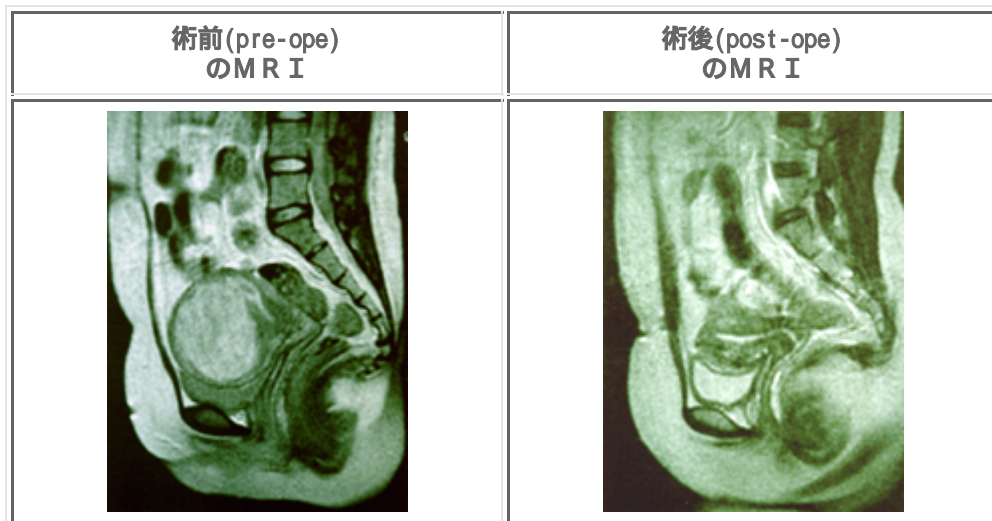
手術後はきわめて順調で、2週間後には父親の入院に付き添うことができました。手術を6月29日に決めたのも、父の入院を控え、その前に私自身が健康を取り戻しておきたかったため、予定通り父の入院の日までにほぼ快復し、父の看病に当たることができたのは幸いでした。

術後25日目に生理が始まりました。このときは出血の量があまりに少なくてビックリしてしまいました。「えーっ、こんなに少なくていいの？」と思わずつぶやいてしまったほどで、今までの生理がいかに異常であったかをつくづく感じました。

そうして夏が過ぎ、秋が深まり、生理が4回きちんと続いたあと次の生理予定日になっても生理が始まりません。ひょっとしたら妊娠？、と市販の妊娠試験薬で調べたところ、反応はマイナス。

ところがそれから1週間たっても生理は始まりません。再度、試験薬でチェック。そして、跳び上がりました。「妊娠」を示すサインがくっきりと浮かび上がっていたのです。

今、おなかの中で出産の日を待っている赤ちゃんは、こうして私の胎内に宿りました。斎藤先生に出会わなければ、おそらく宿ることのなかった生命です。出産は帝王切開で今月の後半になる予定ですが、待ちに待ったわが子の誕生までの日々を元気に過ごしたいと思っています。



	術前 (pre ope)	術後(post ope)
赤血球(RBC)	481	483
血色素(Hb)(g/dl)	13.8	14.2
ヘマトクリット(Ht)(%)	43.1	41.7
備考	切開部：横切開、8cm 摘出物： 子宮筋腫 245g 内膜ポリープ(polyp) 5g 病理：良性	

「ハイティーンから子宮のことを考えないで過ごした日は一日たりともなかった気がする」

山口文代（30才）

術後の証言

術後4回目の生理が始まった。乳房の少々張った感じがあり、量も少なく、痛みらしい痛みは殆どない。夏場の暑いさなかに友人たちが海や旅行に誘ってくれるようになり、とてもうれしい。

階段も一気かけ上がれるようになったし、世の中まで明るく見えてくる。いつ汚すかわからない不安から、下着やズボンに常に気を付けていたが、最近は白などやたらと明るい色調の服装をするようになり、友人たちが目を見張る。

ハイティーンからこの年まで子宮のことを考えないで過ごした日は一日たりともなかった気がする。

病苦の人生

生理の異常が、何歳の頃から始まったか記憶にはないが、中学時代には、体育の日は休んでいたような気がする。生理の量は、他人との量と比べられるものでなく、生理平均総量が40ccと聞かされた時には驚いた。私の一日の量だけでも、それとは比較にならない程多く、病的なものだった。とにかく生理が始まると痛みが走りどうしようもなく、何も手に着かなかった。

最初に検診を受けたのはJ医大。内診、超音波では、筋腫と言われ、次回の来診日には、血液検査上の腫瘍マーカーも高値で子宮腺筋症と診断された。急に出血することもあるので、早く子宮全摘出の日程を決めましょうと言われ、頭の中は真っ白になった。

何とかならないものかとK大学にも通ってみた。子宮を摘出しないでと懇願するものだから先生も暗い表情に変わった。結局、副作用が強いという説明を受けながら鼻から吸引するスプレキアというホルモン治療を半年近く続けた。しかし、その効果は見えないまま病院から遠ざかってしまった。

何度となく救急車のお世話になったが、自宅からそれほど遠くなかったN医大に運ばれた時には、数人の看護婦さんが生理でこんなにひどい状態になると同情してくれたうえ、看護婦さんはとても優しく、私の心はほんの少し救われた思いがした。

やがて、血色素値が4と低く、普通の人のおよそ3分の1なので、急いで輸血しないとショックになるとの説明を受けた。下の出血はまだ続いていたので、周囲が急に慌ただしくなった。輸血には同意したものの、それでもすぐに子宮全摘の言葉には、わたしの人生を全て台無しにするような気がして、首を縦には振れなかった。

心まで病魔に侵されてしまったのでしょう、子宮を全て摘出すれば治せると言った先生の言葉がよくのみ込めなくなっていた。貧血で頭がボーッとする時、このまま死んでしまうのではないかと恐怖におののいたり、またあるときは疲れ果ててしまい、まあいいか……、とさえ思ったこともあった。

輸血や一連の輸液点滴が終了する頃にはふだんの自分を取り戻していた。「ホルモン治療を半年続けましょう。その結果、子宮が小さくなったり、症状が軽減されることがあれば、手術については様子を見てみましょう。」「それでもだめなら子宮を摘出する以外には考えられません。」と、先生は結果の読んでいる事を淡々と強い口調で話された。

副作用の強いホルモン治療をまた6か月間の長期に渡り続けさせらることは、子宮全摘を認めさせる前投薬のようなものだと、医療の矛盾を感じざるを得なかった。泣く子をさとすあめ玉のようにも思えたり、それなら、何も薬害の強い毒を飲まずこともないのではないかと考えたりもした。ともあれ、私の、子宮を摘出されたくないという気持ちが医療サイドを困惑させているのかもしれないとも思った。

あれから3年経過した現在、私の傍らには大勢のチームスタッフを形成した先生方がいらっしゃるにもかかわらず、癌でもない私の子宮一つさえも救い出せずにいる。私はこのことを考えると、ただひたすら泣くだけであった。

私の入院中、偶然にも隣の患者さんは子宮全摘を終えた人であった。向こう側のベッドに70歳代位とおぼしきおばあさんがいた。不思議に思っていて見ていると、隣の患者さんが声を殺して教えてくれた。筋腫が膀胱を圧迫して尿が出なくなり、子宮全摘をしたということだった。それにしても、あの年まで子宮を守った方と聞き、そのおばあちゃんに対して立派だと思い、とても感動したものだ。

広尾での手術の思い出

麻酔は、硬膜外麻酔、痛みらしきものは殆ど感じないままに手術を終えた。ただ、周囲の音、医療器械の音、人の声が耳に入り、逆にこれから痛くなっていくのではないかと不安を感じていた。

先生、麻酔医の先生方が「痛みますか?」「気分はどうですか?」などと、ときおり声をかけて下さる言葉がとってもうれしく、先生方が私の子宮を救おうと必死に取り組んでいる熱意、真摯な気持が伝わり、とてもうれしかった。

手術は、4時間半、壁の時計が見えてはいたが、ウトウトしていたせいか、手術時間が長いという感じはしなかった。術後、ときどき痛みはあったが、生理痛の凄まじさに比べれば、無いに等しいものだった。

背中に麻酔のチューブが残されていて、痛むときはポンプで薬を追加すると聞いてはいたが、そのままの状態での次の日の午後に尿バックとともに抜去されました。その後のトイレは自力で歩行してトイレに行った。

後で聞いた話だが、私と同じ手術日にもう2名の方の手術が行われたとか、先生にとっては15時間の手術、「好きな手術だからやれるのですよ。」とおっしゃっていたが、それにしても先生はタフ、すごい体力だと思った。朝の回診時に再び驚いた。先生はいつお休みになっておられるのかと思った。真夜中の午前2時過ぎに隣室の患者が先生を呼び出し話をしていたこともあった。

泣き言ばかりぐずぐず言って、先生方や看護婦さんたちを困らせてばかりいる私たち患者連中、キビキビと業務を適切にこなす看護婦さんたちの身のこなし、私たち患者への配慮、優しさ。紛れもなく、わたしたちにとっては、天使に思えた。

術後2日がたち、予定どおり土曜日に果たして退院できるかと不安に思っていたが、ヘッピリ腰ながらも歩くことが何とかできるようになったし、痛みも日毎に軽くなってきていた。「ガスが出るともっと楽になるよ。」と先生から言われながらも、出された食事は全て平らげていた。

次の日、患者3人で申し合わせ、二階まで歩いて上がった。お喋りに夢中になっていると、術後の痛みなどまるで忘れてしまっていた。

同じ病気、同じ苦しみ・悩みを持ち合わせた者同士、すぐに打ち解け会い、笑い話ではないが、「私の方がひどかった。」などと、お互い自分の病気の重症度を競い合うなどできたのも、ようやく救われたのだと言う心の底からの安堵感が自分にあったからに違いないと思った。久しぶりに人と心が通い合ったとても楽しい午後のひとときをすごしたものだ。

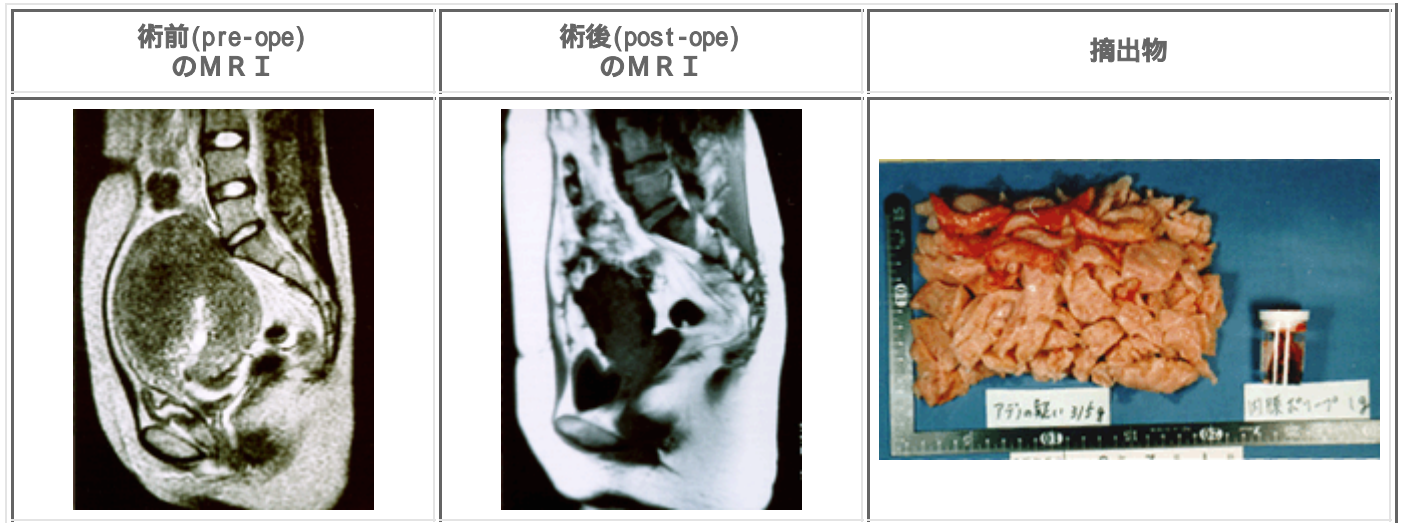
退院の前日、すっかり元気を取り戻した私たちに、院内ドッグのバルチャン(黒のミニチュアダックスフンド)が膝元にすり寄ってきてはケーキをねだった。病院のみんなを相手に戯れるバルチャンの様子を見て、とても気分が癒された気がした。

いつの間にか、私たち患者たちは、手術のために病院にいることすら忘れてしまっていた。こんなステキな病院ならもっと入院していたいなど、患者たちみんなで話したこともあった。しかし、そんな冗談のようなわがまを言っているうちに、とうとう退院の日の土曜日がきてしまった。

千葉の方は、家族の迎えの車で退院。もう一人の方は、福岡まで飛行機で帰途に、私は、大阪の実家で少しの間すごしたかったので、新幹線で帰途に付くことになった。

先生の自家用車で、羽田経由で東京駅まで送って下さった。プラットホームで手を振りながら別れる姿は、私がまるで映画の中のヒロインになったような気がした。

先生、看護婦さん、事務長、それにパルチャン、こんなに元気になって下さって本当にありがとうございました。



	術前(pre ope)	術後(post ope)
赤血球(RBC)	348	485
血色素(Hb)(g/dl)	29.6	14.0
ヘマトクリット(Ht)(%)	9.5	41.5
CA125	>500	39.6
CA19-9	360	31.8
備考	摘出物： 315g(病理:腺筋症 Adenomyosis) 内膜ポリープ(polyp) 1g 横切開 両側卵巣を正常温存した。 全ては良性 (No malignancy)	

「タイムリミットぎりぎりで救われた生命」

中村多恵（32才）

妊娠9週目の子宮保存手術

長女の香音(かのん)が誕生したのは2月19日。妊娠38週で帝王切開で生まれ、早いものでもう半年が過ぎました。生まれたときには2,354グラムと小さかった香音ですが、母乳をよく飲んですくすくと育っています。寝ているばかりだったのが、今ではくるりと寝返りをうったり、声をあげてみたり、笑ったりと、身体の動きも表情もとても活発になりました。

香音の世話に追われ、つい1年ほど前に体験した「タイムリミットぎりぎりの手術」が随分昔のこのように思えます。タイムリミットぎりぎりの手術とは、妊娠9週目に受けた子宮保存手術です。芽生えたばかりの胎児を救い、妊娠とともに急速に大きくなった筋腫を取り除いて妊娠を継続させる手術です。広尾ではこれまでに4人の女性が同じ手術を受けて、無事に産んでいるようですが、そういう先輩たちがいることはとても心強いことです。

そして、なんとという巡り合わせか、私が手術を受けた同じ日に、もう一人、私と同じ手術を受けた妊婦さんがいました。その方は早産ではありましたが、無事に男の子が生まれています。

あの時に手術を受けていなければ、おそらく香音もその坊やもこの世に生を得ることはなかったと思うと、改めて手術を受けることができた幸運と、手術によって胎児を助けてくださった斎藤先生への感謝をかみしめています。

以下に、妊娠がわかってから手術を受けるまでの3週間に起きた、まったく予期しなかった出来事についてお話します。

妊娠と同時にわかった筋腫

Mクリニックの医師には「2週間後に来るように」と言われていたのですが、とても待ちきれず、10日後の15日に再びMクリニックへ行きました。なぜなら、この10日の間に日に日にズボンがきつくなり、仰向けに寝ていられないほどお腹が急速に大きくなってしまったからです。いったいどこまで大きくなるのだろう、子宮が破裂してしまうのではないかと、という恐怖に駆られて、「これは絶対に変だ」と思いMクリニックへ行ったのです。

ベッドに横たわって腹部を出すと、看護婦さんに「何週目ですか？」と聞かれました。「7週目です」と答えると、「えっ、7週目?!」と聞き返す声とともに驚きの表情が看護婦さんの顔にありありと浮かぶのがわかりました。ああ、やっぱり変なんだ…。不安な気持ちで医師の診察を受けると、「これは！」と言ったきり、医師は表情を固くしました。その様子から、これはただ事ではないと確信し、頭の中が真っ白になってしまいました。

医師の説明では、妊娠によってホルモンの分泌が変化し、筋腫が急速に大きくなっている、このままでは流産するだろう、とのことでした。

それからというもの、考えることはお腹の赤ちゃんのことばかり。「流産」の2文字が頭から離れず、出勤するために駅の階段をあがる時も電車に乗る時も、おっかなびっくり動き、絶えずお腹の赤ちゃんに「ポンちゃん、ママのお腹にしっかりつかまっていますね。いい子でいてね。まだ出てこないで」と話しかけました。ポンちゃんというのは私が赤ちゃんに呼びかけていた名前です。

2～3日おきに病院めぐり

Mクリニックの医師に大きな病院に行くように言われて選んだ先は、1時間ほど離れた実家の近くの市立病院でした。いずれ出産は里帰りして、と思っていたためです。ここでも「筋腫が大きいので、いずれ流産する」と言われ、「母胎のためにはむしろ通院に時間のかからない自宅の近くの病院にかかっていた方がよい」とのアドバイスを受けました。

そこで、その3日後には自宅近くの市立病院へ。ここでは経膈エコーで胎児が無事であることを確認してもらいましたが、言われたことは同じで「流産するだろう」とのこと。そのうえ、「短い間に病院をあちこち変えるんじゃない」とまで言われて、悲しいやら悔しいやら、すっかり落ち込んでしまいました。

それでも私は病院めぐりを止めませんでした。この頃の手帳を見ると、2～3日おきに違う病院を訪ねています。出勤しても仕事どころではなく、病院に通うために半休をとり、先輩の女性に相談したりと、赤ちゃんのことで頭がいっぱい。あちこちと病院をジプシーしたのも、「自分で納得できる医者に出会えるまで、セカンド・オピニオン、サード・オピニオンを求めていかなくは」という先輩のアドバイスによるものでした。

そして、最後に行ったところが広尾でした。広尾のことは、妊娠と同時に筋腫があることがわかって近所の図書館で借りた数冊の本の中に斎藤先生の『子宮をのこしたい』もあり、それで知りました。広尾を母と夫と一緒に訪ねたのは7月23日、市立病院で「病院をあちこち変えるな」と叱られた2日後でした。

えっ、もうタイムリミット？

斎藤先生にエコーで診ていただくと、胎児が確認できません。おそらく筋腫に遮られて映らなかったのだと思いますが、斎藤先生は「もうダメかもしれないよ」とのこと。でも、2日前に経膈エコーで胎児の無事を確認していたこともあって、私には「絶対、大丈夫。生きています」という確信がありました。

ところが、斎藤先生の話聞いて、私も母も夫も驚きました。妊娠と筋腫の合併症の手術は、胎児が大きくなるとできないため妊娠9週がタイムリミットだと言うのです。その時、私は9週目に入ったところでした。「えっ、もうタイムリミットじゃない!」と思わず3人で顔を見合わせました。

しかも、直近の手術日である7月27日はすでに2人の患者さんの予約が入っており、その次の手術日は夏休み明けの3週間後になってしまうとのことで、これでは間に合いません。驚きのあまり母が声高に「それで赤ちゃんが助からなかったらどうするんですか?!」と聞くと、「仮に今の赤ちゃんはダメでも、手術によって筋腫を取り除いて子宮を残し、次の妊娠に備えることはできます」とのこと。それで、一番近い検査の日に予約を入れていただいて、とりあえず2日後の25日の土曜日にMRIなどの検査をすることになりました。手術は広尾の夏休み明けです。

斎藤先生はこの時、エコーで胎児が確認できなかったこともあって、胎児の生存には消極的な見方をしておられたのかもしれませんが、しかし、赤ちゃんは絶対に生きてると信じていた私は、直近の手術日に手術してもらえたら間違いなく赤ちゃんは助かるのに、と諦め切れない気持ちでいっぱいでした。それは母も夫も同じだっただろうと思います。

手術当日に「今から来てください」

ところが、7月27日の午前中、会社に電話がありました。斎藤先生からです。「きょう手術をしますから、これから支度をして来てください」とおっしゃるのです。もう、びっくりです。「いきなり言われても…」と返事に窮していると、「とにかく、いらっしゃい。赤ちゃんは生きていますから、きょう手術すれば助かる」とおっしゃるのです。土曜日に撮ったMRIの画像で赤ちゃんが無事であることを確認された先生が、きょう手術しなければ赤ちゃんを救うことはできないと判断されて、急遽、手術の予定に加えてくださることになったのです。

それからというもの、上司に事情を話して休暇をとり、夫に電話をし、母に知らせ、バタバタと入院の用意をして午後には広尾へ。まさに急転直下の手術となりました。

広尾に行ってみて驚いたことがもう一つありました。それは、私と全く同じケースで、きょうになって「手術をしますから、来てください」と連絡を受けた妊娠9週目の妊婦さんがもう一人いたことです。彼女と話すうちに、偶然にも家も近いことがわかり、なんという巡り合わせかと喜び合いました。

私たち2人の手術が急遽加わることになって、この日の手術は4人となり、先生にとっても看護婦さんにとっても大変な一日だったことと思います。

手術は彼女が3番目で、私は4番目。私の手術が始まったのは夜の9時からで、手術を待つ間、私はずっとお腹のポンちゃんに話しかけていました。「ポンちゃん、これから手術だから、筋腫から離れたところにいてね。ママと一緒にがんばろうね」と。

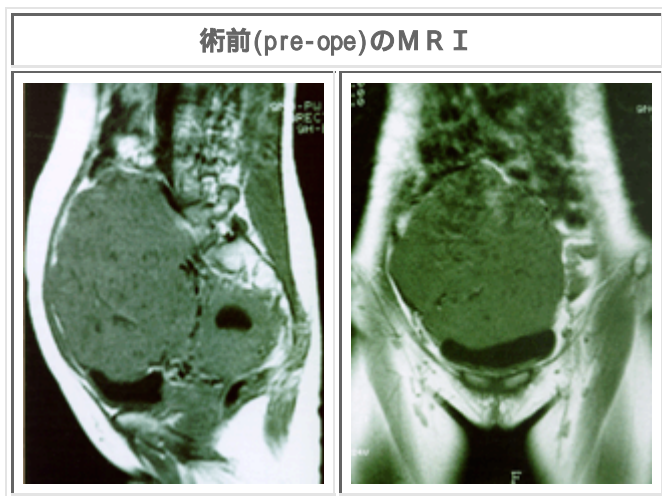
やっと普通の妊婦になれた

手術は11時過ぎまでかかり、1,055グラムの筋腫を取り除いていただきました。妊娠してからわずか1ヶ月あまりのうちに、筋腫がこんなにも大きくなってしまっていたなんて。この勢いで筋腫が大きくなっていったら、おそらく当初予定していた夏休み明けの手術では間に合わなかったでしょう。改めて、急遽執刀して下さった斎藤先生に感謝です。

手術後初めてエコーでお腹の赤ちゃんの様子を見た時の感動は忘れられません。

1キロを超える筋腫を取り除く大手術に耐え、伸び伸びと大きくなったポンちゃんの姿がはっきり映し出されたのです。ああ、これで私も普通の妊婦になれた！、と心の底から嬉しくなったことを覚えています。あちこちの病院で「流産する」と言われるたびに、どんなに普通の妊婦になりたい、と思ったことでしょう。それが広尾で現実のものになったのです。

同じ手術日に同じケースの患者さんがいたということも、その後の私にとって何よりの財産です。彼女とは同じ「まな板の上のコイ」仲間。お互いの妊娠中の経過を報告し合ったり、一足先に帝王切開で出産した彼女からは出産の時の様子を教えてもらったり、そして、今は子育ての情報交換をしています。こういう友人に出会えたことも、広尾にたどり着かなければ得られなかった幸運です。



	術前 (pre ope)
赤血球(RBC)	428
血色素 (Hb)(g/dl)	13.2
ヘマトクリット(Ht)(%)	37.3
CA125	150
備考	摘出物 1,055g